大学生における学習意欲の変化を規定する要因
－横断的・縦断的分析による検討－

○松島るみ・尾崎仁美
（京都ノートルダム女子大学 心理学部）

【問題と目的】大学在学中、学習意欲には変化がみられることが指摘されており（後藤, 2003, 湊, 2004, 松島・尾崎, 2008）、また、学生生活サイクル（福田, 2001）の視点からも、在学時期における学習意欲の変化を規定する要素を検討する必要性があると考えられる。学習意欲が変化する要因は、学年に共通する側面もある一方で、学年特有の特徴があることが示唆されている（尾崎・松島, 2006）。本研究では、横断的・縦断的分析を行い、学習意欲の上昇や下降について、大学生自身がどの様な理由づけを示すのか検討することを目的とする。

【研究1（横断的分析）】学習意欲を規定する要因を検討することを目的とする。

【方法】
調査対象者は、2004年度～2006年度に心理学科に入学者1251名のうち、2006年1月の調査に参加した1153名を対象とした（1年生59名、2年生70名、3年生54名）。

（1）学習意欲の上昇・下降を尋ねる項目：「4月から現在までを振り返って、あなたの学習意欲はどの様に変化しましたか？」と尋ねた。選択肢は、非常に上昇した、やや上昇した、ずっと高かった、非常に下降した、やや下降した、ずっと低かった、の6件であった。

（2）学習意欲の上昇・下降の理由に関する尺度：予備調査をして、京都府内の大学3、4年生150名を対象に、授業に対する学習意欲が変化（上昇・下降）した理由をそれぞれ自由記述で尋ねた。収集された項目はKL法により、授業・学年、大学生活、進路、その他のカテゴリーに大別された（尾崎・松島, 2006）。このカテゴリーを参考にしながら、上昇・下降の理由ともに、各学年数の尺度が作成された（1）で、非常に上昇した、やや上昇した、ずっと高かったと回答した者には、学習意欲上昇の理由を尋ねる尺度に、非常に下降した、やや下降した、ずっと低かったと回答した者には、学習意欲下降の理由を尋ねる尺度に回答する様、示された。

【結果】
（1）学習意欲の変化について：各学年による1年間の学習意欲の変化状況は、非常に上昇した、やや上昇したと回答した者が1年生32.6%、2年生32.9%、3年生63.0%であり、また、ずっと高かったと回答した者は、1年生3.4%、2年生6.8%、3年生5.6%であった。非常に下降した、やや下降したと回答した者、1年生35.6%、2年生24.3%、3年生24.1%であった。ずっと低かったと回答した者は、1年生8.5%、2年生14.3%、3年生7.4%であった。横断データでは、1年生後期に学習意欲が低下したと捉えている者が最も多いことが示された。

（2）学習意欲変化の理由について：学習意欲上昇・下降の理由を尋ねる各項目について、非常にあてはまる、ややあてはまると回答した者の割合を算出した。学習意欲上昇の理由として3学年ともに6割以上の肯定率を示したのは、1年進学を希望したから、2学年進学を希望したから、3学年進学を希望したから、4大学生活に慣れたからであり、1.2年生では、大学の授業、大学生活の慣れを意欲上昇の理由として肯定する者が多かった。一方、3年生については、卒業論文の就職、進学を意識し始めたことを、学習意欲の上昇理由として肯定する者が多かった。学習意欲の下降の理由として、3年生共通で5割以上の肯定率を示したのは、8.9段階以上で忙しかったから、21.1段階以下やる気がおきなかったから、28.学年途中で気持ちがゆるむ様子が始まったから、であった。その他、1年生では、15授業内容が理解出来なかったから、2年生では自分が何に向いているかわからないから、3年生では、10進路に迷い始めたから等が高い傾向にあった。

【研究2（縦断的分析）】学習意欲を規定する要因を検討することを目的とする。

【方法】
調査対象者：2004年度に心理学科に入学した女子大学生のうち、2005年1月、2006年1月、2007年1月の全調査に参加した54名を調査対象者とした。

【結果】
（1）学習意欲の変化について：各学年による1年間の学習意欲の変化状況は、非常に上昇した、やや上昇したと回答した者が、1年生61.2%、2年生72.3%、3年生63.0%であり、ずっと高かったと回答した者は、1年生1.9%、2年生3.7%、3年生5.6%であった。非常に下降した、やや下降したと回答した者が、1年生26.0%、2年生16.7%、3年生24.1%であった。ずっと低かったと回答した者が、1年生11.1%、2年生7.4%、3年生7.4%であった。

【考察】横断・縦断的分析の両結果における変化は、学習意欲変化の理由として、「大学生活の慣れ」が2006年度に最も多く、「就職」が2007年度に最も多く、「進学」が2008年度に最も多かった。また、「授業の理解度」が2006年度に最も多く、「学年上昇」が2007年度に最も多く、「進路選択」が2008年度に最も多かった。この傾向は、大学在学中の変化傾向を示している。

【結論】
学習意欲変化の原因として、「大学生活の慣れ」が最も重要である。特に、学年上昇が原因である。